

1 型糖尿病患者はコントロール良好でも死亡リスクが2倍

1 型糖尿病患者の血糖コントロールの程度と死亡のリスクについては明らかにはされていない。そこで本研究では、血糖コントロールレベルの違いによる死亡リスクについて、糖尿病患者集団における観察研究を行い、検討した。

スウェーデンの糖尿病患者が登録された 1998 年 1 月 1 日以降のデータベースより 1 型糖尿病患者 33,915 例を患者群とし、さらに、年齢・性別・居住地域で適合した一般住民から患者 1 例に対し 5 例を選出し、169,249 例を対象群とした（平均年齢は患者群 35.8 歳、対照群 35.7 歳；ともに女性 45.1%）。平均追跡期間は患者群で 8.0 年、対照群で 8.3 年であった。期間中の全死因死亡は患者群で 8.0%、対照群で 2.9% となり（補正後ハザード比：3.52）、心臓血管病による死亡はそれぞれ 2.7%、0.9% となった（補正後ハザード比：4.60）。対照群と比較した、患者群の血糖コントロールレベル別の補正後ハザード比は、全死因死亡については糖化ヘモグロビン値 6.9% 以下群で 2.36、同値 7.0~7.8% 群で 2.38、同値 7.9~8.7% 群で 3.11、同値 8.8~9.6% で 3.65、同値 9.7% 以上で 8.51 となった。同様に、心臓血管病による死亡については各血糖コントロールレベル群でそれぞれ 2.92、3.39、4.44、5.35、10.46 となった。

したがって、糖化ヘモグロビン値 6.9% 以下の、血糖コントロールが良好な 1 型糖尿病患者においても、全死因死亡や心臓血管病による死亡のリスクは適合一般集団の 2 倍であることが示された。

出典：The New England Journal of Medicine. 2014; 371(21): 1972-1982